

風土記の丘の花だより²²⁷

今、そしてこれから見られる植物(2024年3月16日)

寒暖を繰り返していますが、一雨ごとに春に近づいていることを実感できます。カンヒザクラは散りましたが、オオシマザクラのツボミが膨らんできています。ところで、風土記の今年のソメイヨシノの開花宣言はいつになるのでしょうか、楽しみです。



キランソウが咲き始めました。シソ科の草で、春の日差しをいっぱい受けようと、地面に張り付くように生えます。写真ではまだ2輪しか咲いていませんが、この花がビッシリ咲く様は、全体が鮮やかな紫色に見えてとてもきれいです。別名を「地獄の釜の蓋・じごくのかまのふた」というそうですが、先日、観察会の参加者の方から「墓石の周りにびっしり生えているので、まさに地獄の釜の蓋みたいです」というお話が聞きました。「なるほど、そういう意味だったのか」と感心した次第です。



ハクモクレンがやっと咲きました。よくコブシと間違われます。コブシはもう少しお待ちください。入り口の木に「コブシ」の名札がかかっている、ハクモクレンの名札がないので、全部がコブシだと思ってしまって無理もないですね。(こちらの責任です。すみません) 純白で美しい花ですが、花期が短く、散り際もだらしないので、鑑賞する期間が限られます。コブシが咲いたら花をよくご覧ください。小さな緑の葉が一枚付いていますよ。それで見分けられます。



何と地味な花でしょうか。ケタガネソウというカヤツリグサ科の草の花です。タガネソウで、葉の縁に毛が生えているタイプをこう呼びます。この時期、葉はまだ出ていなくて、茶色く冬枯れのまま垂れ下がっています。スゲやカヤツリグサの仲間の葉は普通もっと細長く、イネ科の草のようですが、タガネソウの葉は幅が広くササみみたいです。タガネとは石や金属の加工に使う道具「鑿・たがね」のことで、葉がその形に似ていることで、名付けられました。普段気にも留めませんが、道沿いの斜面、どこにでも生えています。



とても小さな白い花、ヒメウズがあちらこちらで咲いています。下向きに花を付けますが、白い花びらのようなものは、萼で、中を覗くと本当の花が見えます。葉は深く切れ込んだ形で、3枚一組で付きます。ウズとは狂言「附子・ぶす」などでも知られる猛毒の原料となるトリカブトのことです。この草はそれに似て、小さいのでヒメが付いています。ヒメウズを抜いてみると、根元から大きな塊が出てきますが、猛毒、附子はトリカブトのその部分から作るそうです。 松下